

脳性麻痺者の生き方と価値観について

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
木戸口 峻

本研究では脳性小児麻痺と診断された A 氏の小学校時代から中年期までの人生について半構造化面接を行ないその語りを分析した。脳性麻痺者を対象とした理由は、筆者自身が脳性麻痺者であること、1970年代に盛んだった青い芝の会による自立生活運動が日本において脳性麻痺者のじりつ生活に向けた初の運動だと考えたためである。障害者を対象にした発達心理研究の研究は少ない。障害者心理についていえば、研究倫理上の問題から研究が進みにくいことも理由の一つと思われる。本研究では脳性麻痺者である 57 歳の A 氏のこれまでの生活についての面接調査から、A 氏のこれまでの人生での転換期はエリート意識が崩れた時と作業所での K 君との出会いの 2 つの時期ではないかと考察した。エリート意識が崩れた時期は、それまで軽度の障害者との比較によってできあがっていた有能感が崩壊したと要求運動の成果が出なかったことではないかと思われる。下方比較をしていた相手が A 氏より“できる”ことに気付いたことも、その一つの理由と考えられる。本研究は事例検討であり、一人の対象者の方の語りしか聴くことができなかった。事例研究のケースを増やしていくことにより、脳性麻痺を持った方の心理やライフサイクルの事例を増やすことが今後の課題である。